

同窓生シリーズ 第84回

10回生 村上 光一

Kohichi Murakami



略歴 /

1940年 生まれ

1958年 新宿高校卒業

1962年 東京外国語大学スペイン科卒業

同年フジテレビ入社。「白い巨塔」「欽ドン」「ひょうきん族」「笑っていいとも」など手がけ、「楽しくなければテレビじゃない」時代のフジテレビを牽引。劇場映画「LOVE LETTER」「踊る大捜査線」などを製作。

2002年から2007年までフジテレビ代表取締役社長 現在同社顧問

2009年から東京外国語大学理事

2009年から13年まで朝陽同窓会会長

タイムトゥウリメンバ―

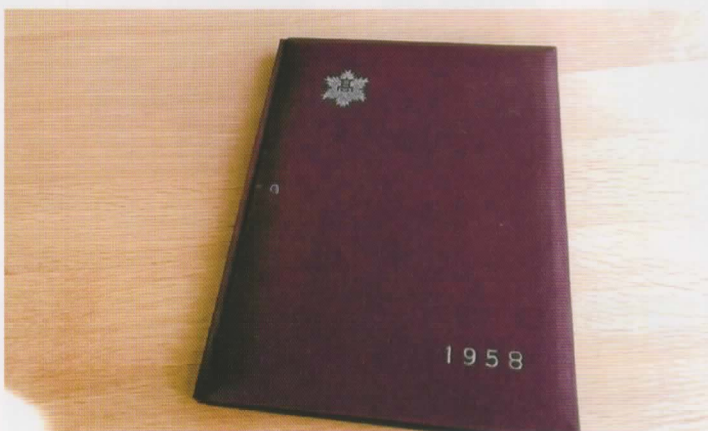
私の書棚にすっかり色あせたまま今も大事に置かれている一冊の写真集がある。56年まえの私の新宿高校卒業アルバムである。なにせ引越越しをくりかえすたびに高校時代の思い出のものはいつのまにかほとんど散逸してしまった。高校の通知表はどこかにしまったことはたしかだが、その場所はどうしても思い出せないし、もうこのとしでは生きている間に見つけ出すことも不可能と思うのだが、どういうわけかこの卒業アルバムだけは汚れた箱ケースもそのままに、いつでも手にとることができるところにおいてある。

テレビ局の社長を退任してほっとしていたころ、朝陽同窓会で活躍している昔のクラスメートから、「昔お世話になった高校に恩返しをする時ではないのか」とおどかさされ、気がついてみれば、同窓会の会長職という大役を引き受けることになってしまったのだが、そのとき急に取り出す気になったのが、この古い卒業アルバムだった。このアルバ

ムをめくっていると、50数年まえの高校時代がまざまざとよみがえってくる。3年次のクラスのさまざま集合写真は、その撮られた季節まで思い出すことができる。正直、卒業アルバムを見ながら、永く疎遠にしていた母校との縁をそろそろ大事にするときが来たのかもしれないな、と思ったことだった。

このアルバムのなかで特別な感慨をよび起こす写真がある。2年の学園祭にクラスで取り組んだ舞台の写真である。「海底の六人」という題名どおり潜水艦のなかに閉じ込められた男たちの群像劇だったが、その上演の効果係が私の担当だった。海水が艦を襲う音づくりに夏休みがすっかりつぶれてしまったこと、劇的な音楽をと言われて、レコード探しに当時学校の向かいにあったコタニに放課後閉店までねばって、ようやくシベリウスの「フィンランディア」を選んだ日のこと。(そのSP盤がいまだに私のレコード棚に保存してあるのは、よほど思いが残っているのだろうか)。上演が終わって一同沸き立つなかで、演出担当から「効果の音よかつたぜ」と言われた時の何とも言えぬ安堵感。もしかするとあのとき経験した「ものづくり」のおもしろさ、そして苦しきまでもが、後年わたしが職業としてテレビの仕事を選ぶきっかけとなっていたのかもしれない。

そんなことで、わたしが同窓会の会長職をやっているあいだ、毎年楽しみだったのが、秋の「朝陽祭」だ。なかでも毎年2年生の全ク



ラスがとりくむ「演劇」は必ずのぞかせていただいた。ともかく感心させられるのは、みなよく演じ、歌い踊る。音楽に対応するいまの高校生センスはわれわれの世代にはなかったものだ。わたしが今の新宿高校の頼もしいエネルギーをつよく感ずるときでもある。母校をたずねて、青春まつただなかの生徒たちの元気な力が、学校を勢いあるものにするのを見るのはじつに楽しい。卒業アルバムのなかの50年前の自分はもう永遠にもどってこないが、つぎの世代、またその次の世代へと世界はうけつがれていき、若い力がつねにあたらしい進化を呼び込んでいくのを実感する。母校とのこの数年の縁で、これが、一番の財産になったかもしれない。